

# 生きて働く力の育成と取り組む中学部の実践研究

——発達に応じた個の育成と保護者との連携——

中学部主事 山 里 一 夫

## 1. 実践と研究に対する中学部の基本的構え

中学部の教育は、「小学部で身につけた日常生活の基本的な事柄や集団参加の初歩的な事柄を、拡大深化することで、徐々に地域社会のしくみや働きの基本的理解を深め、進んでこれらに参加しながら、将来の職業人あるいは家庭人としての技能態度の育成につとめ、高等部における教育の基盤をつくる。」(研究紀要第1集)ことである。要約すると、中学部の実践は、「身辺自立」と「社会参加」をめざして組立てられ、行われているということで、創立10周年を迎えた今も、少しも変りはないのである。ただ、10年の経過の中で、逐年重度化多様化する対象児に対応するため、指導事項や内容を工夫し検討しながら取り組んできた。その中で、基本的構えとして常に念頭においてきた事は、指導事項が、ひとりひとりの生活の中で、具体的に生きて働いていることを条件としてきたのである。

## 2. 生きて働く力の育成と取り組む指導の原則

精神薄弱教育の評価では、学習事項が理解されているかではなく、態度として身につけているかを基準にする。精神薄弱児の行動や心理的特性から考えると、当然の事であるが重要である。生きて働く力は、今日の学習が将来の生活に役立つはずだと言う力ではない。今日の生活に生きて働いていなければならないのである。このことについて、研究紀要第3集で、「子どもたちが表現しようとする行動を通して、能力的・態度的に充実した日々が送れるように、生活経験を獲得・拡大していこうというのが、(学習指導の)基本的態度である。」と述べ、更に、「単純な数詞や乗法九九の暗唱のくり返し、安易な漢字書き取りや計算ドリルのくり返しなどは、学習が「生きて働く力」として効果的に働くとは考えられない。」と論じ、知育偏重は、「知能に障害をもつ子らにとって、負担ばかり多く、効率の悪い学習であろう。」と結んでいる。この考え方に立って、次のような日々の実践指導の原則をふまえて、学習と取り組んでいる。

- (1) 具体的操作の原則 指導は子どもの具体的な生活・行動を通して進められる。
- (2) スモールステップの原則 指導は抵抗を少なくして、興味・関心・意欲の持続を考える。
- (3) 反復練習の原則 生活の中で、具体的に繰り返し指導し、定着をめざす。
- (4) 集団化の原則 人とのかかわりを重視し、集団の中で学習を進める。
- (5) 個別化の原則 生活経験・学習能力等的確にとらえ、個に応じた指導を進める。
- (6) 生活活用の原則 指導事項が、日常生活に生かされるよう工夫する。

## 3. 中学部の実践研究の経過と概要

本校の教育課程は、0才児からの心身の発達をふまえて編成された段階別教育内容表が基本となる。その内容表は、子どもが表現力を獲得し、それを深化拡大していくことで、身辺自立と社会生

活をめざすという観点に立って、子どもの生活経験を6段階に分けて示したものである。(研究紀要第1集～第3集) 本校では、この教育課程の中核を表現する力の育成であると考え、中学部では、「確かな生活力を身につける」ことをめざして実践研究と取り組み、教育課程の具体的な編成と展開・指導を模索してきた。(研究紀要第3集)

教育課程の編成作業とその試行により、小学部から高等部まで一貫した教育内容の精選と構造化ができた。しかし、教育課程の展開指導の面で、「本校小・中・高3学部の関連性・一貫性をさらに明らかにする必要がある。」ということから、「表現されるべき心的内容の充実を旨とした取り組み」に注目して、研究主題を、「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」の育成とし、「より高い水準に発達していく姿」を追究していったのである。「 」は、研究紀要第5集の抜すい)

中学部では、生徒ひとりひとりの、「豊さ」「まずしさ」「たくましい行動」「たくましくない行動」の実像を明らかにしようと試み、「心が豊かでたくましい行動の見られるタイプ」「心の働きも行動もひ弱なタイプ」など、5つのタイプとそれぞれの指導法を模索していった。その過程で、5つのタイプは、それぞれの生徒の持ち味であり、ひとりひとりのよさを生かしながら、問題点の除去・改善と取り組み、「身辺自立」「社会自立」をめざした「生きて働く力」の育成と取り組んできた。(研究紀要第5集～第6集)

3年間の実践研究では、個の育成が究極の課題となり、今回の「発達と障害に応じた教育」との取り組みは、「いいかえれば、この新しい主題は、前回の研究から来る自然な帰結ということ」になるのである。(研究紀要第7集)

その中で中学部の取り組みでは、「個に視点のあてた指導には、家庭と学校との相互の協力が不可欠である。」という立場から、従来の取り組みを家庭生活に延長して構造化し、生きて働く力の育成をめざしたのである。

#### 4. 本年度の実践研究の概要

八木は、肥満児の衣服の着脱を、生活の中でパターン化し、反復練習することで効果を挙げている。同じ肥満児と取り組んだ渡辺は、肥満解消に家族の協力が得られず、失敗した事例である。保護者とその日の出来事を話し合ったり、学校のように知らせたりすることは易しいが、指導を家庭に延長することの難しさを痛感する。自閉児と取り組んだ前島は、指示でみんなと行動できる子をめざした指導の中で、声かけや励ましと反復練習と、家庭生活に直結した課題(調理)と取り組み、効果をあげている。同じ自閉児の自立と取り組んだ塩見は、自分の力で作文や日記をかくまでの事例について述べているが、家庭との連携が効果的に働いているようである。

言語障害があり、意欲的な活動の見えない子に、自信を持った行動をさせようと取り組んだ石脇の事例では、明らかに母親の変容が、自信のある行動につながっている。反対に橋本は、子どもに強い愛情を持ちながら、我が子の失敗や行動に暴力をもってしか対応できない父親との連携に苦慮している。ガーゴリズムと闘いながら生きる子と1対1で取り組んできた田中の事例は、保護者と協力して、残された能力を精一杯活かして生活する子の記録で、例え重度の子でも、何もできない子はいないということを教えられるのである。以下項をあらためて各事例について述べる。